

2. 中津式土器について

前節で述べられているように本遺跡の堅穴群出土土器は阿高式系が主体で、本遺跡では坂の下I式後半期～坂の下II式にかけて中津式が並行するが、北部九州の中津式を理解するために、瀬戸内地方の中津式を検討する必要があろう。そこで中津式とそれと関連する関東地方の称名寺式について若干の考察を行ないたい。なお、資料的制約のため精製深鉢を中心とする。

(a) 研究小史

中津式は、1933年に三森定男氏によって瀬戸内地方の後期初頭に位置づけられた。⁽¹⁾その後、⁽²⁾鎌木義昌・木村幹夫氏、⁽³⁾松崎寿和・間壁忠彦氏らによって、渦文や曲線的な文様を描く磨消繩文土器と沈線文土器、及びヘタナリによる条痕を有する無文土器がセットをなして中津式を構成し、その曲線が入組み化し、3本沈線化することによって福田K II式（後期前葉後半）が成立すると理解されている。その後、1970年代になって、中津式に類似する関東の後期初頭の称名寺式との関連で、①中津式の伝播によって称名寺式が成立、②称名寺式の伝播によって中津式が成立、⁽⁴⁾③称名寺I式は加曾利E IV式の系統を引く土器群と中津I式の影響を受けた土器群から成る、⁽⁵⁾という3つの見解が出されており、中津式・称名寺式の成立が問題となっている。そこで、まず関東地方～瀬戸内地方の中期後葉の様相を概観し、次に称名寺式・中津式について検討した上で、九州の中津式について触れたい。なお小稿では便宜上、中津式を東海地方以西の土器様式として論を進める。

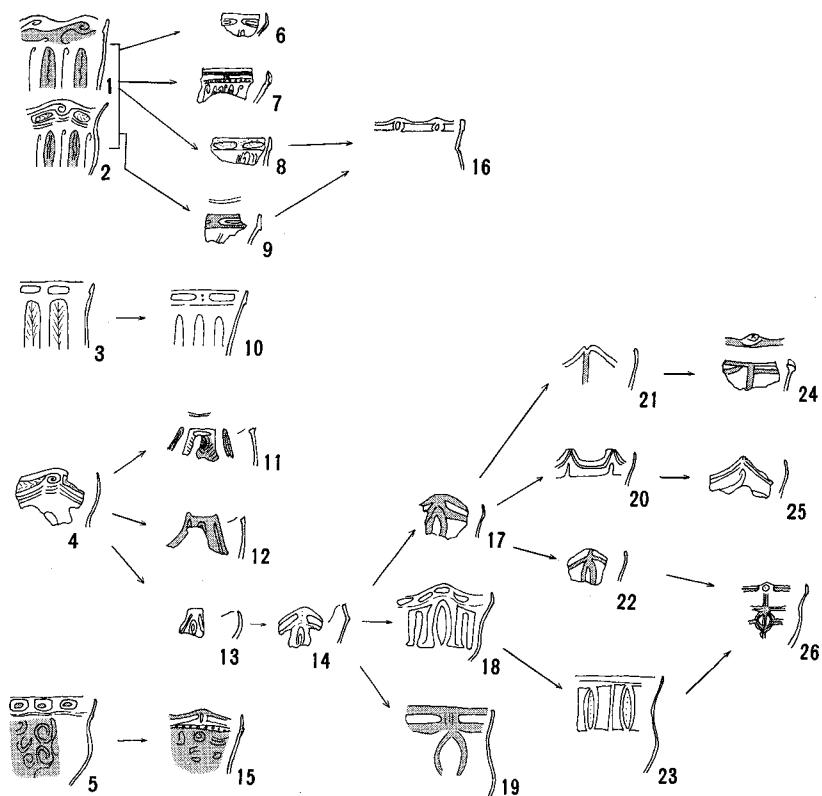
(b) 中期後葉の様相

関東地方から東海地方東部では、中期後葉～末にかけて、加曾利E II式→E III式→E IV式が存在するとされており、⁽⁷⁾東海地方西部では細分が進んでいるが、文様等から判断して、ほぼ中富式・（咲畑式）・神明式を加曾利E II式併行、取組式・島崎III式・山の神式を広義の加曾利E III式と考えることができる。

ところで、東海地方西部～近畿地方にかけて、第1図6～13に示すような土器群が分布する。文様に着目すると、7・8は口縁部に棹状のモチーフを有し、胴部は長楕円文と蕨手文の組合せであることから、1・2との関連が窺える。6・9も7・8同様、口縁部に棹状のモチーフを有し、6の口縁部文様帶作出法（屈曲）が7と共に、9の口縁部文様帶作出法（肥厚）が8と共にすることから、6・9を7・8と同一群とみなせよう。10についても同様の理由で6～9と同一群とることができ、文様論的には3との関連が知られる。この一群は三重県鈴鹿市東庄内B遺跡、愛知県知多郡南知多町林ノ峰貝塚、岐阜県恵那郡坂下町門垣戸遺跡、⁽⁹⁾京都市京大農学部遺跡、鳥取市桂見遺跡などで出土している。

11～13は方柱状の山形口縁を有し、文様に着目すると、渦文・同心円文と棹状モチーフの組

合せであることから、これらを同一群とみなすことができ、文様論的には4との間に関連性が認められる。この一群は三重県東庄内B遺跡、岐阜県不破郡関ヶ原町中野遺跡、揖斐郡徳山村宮ヶ原遺跡⁽¹⁴⁾、京都府京大農学部遺跡、鳥取市桂見遺跡で出土しており、東海地方西部～近畿地方、



第1図

および鳥取県の東部まで分布し、既述の6～10の土器群の分布範囲とほぼ一致する。

ところで、1～4は東海地方の島崎III式・山の神式に比定でき、既述したように広義の加曾利E III式と考えられることから、仮に7・8→1・2、10→3、11～13→4という方向性を想定すると、7・8・10・11～13は加曾利E II式併行ということになるが、加曾利E II式ないし、併行様式の器形・文様構成とは大きく異なることから、この方向性は想定し難い。一方、この両群を出土した三重県東庄内B遺跡では中津式は出土せず、東庄内A遺跡ではその逆の状況が見られることを考慮すると、これらを加曾利E III式に後続する中期末の土器群として把握できよう。

さて、14については、器形は異なるものの、文様論的には13→14という変化が窺える。さらに、14の口縁部文様帶作出法が6・7と共にすることから同じく中期末に位置づけられ、15は文様論的には5（加曾利E III式併行の曾利式）の系統を引くと考えられるもので、口縁部文様帶作出法は異なるものの、口縁部モチーフの共通性から、同じく中期末に位置づけることができよう。

以上述べてきたように、中期末に位置づけることのできる一群を「平式」とすると、いずれも加曾利E III式ないし、それに併行する曾利式の系統を引くもので、東海地方西部～近畿地方

に分布することが知られる。ところで、東瀬戸内地方～近畿地方では中期後葉に里木II式が主体的に分布するが、里木II式に先行する船元IV式に加曾利E II式の影響が認められるとされるとから、里木II式を加曾利E III式併行と考えることができる。一方、里木II式から平式への型式変化は考え難いことから、加曾利E III式を祖形とする平式は東海地方西部で成立し、近畿地方へ伝播したものとみなせよう。また、東瀬戸内では里木II式の地文の撚糸文を貝殻条痕に置換した里木III式が中期終末に位置づけられているが、文様構成など、里木III式、および、西瀬戸内の中期後葉～末に位置づけられる福田C式⁽²⁰⁾と後続の中津式との間に共通する要素がほとんど見られないである。

さて今村啓爾氏は称名寺I式を、加曾利E IV式の系統を引く一群と、その系統を引かない一群とに分離し、前者をb類、後者をa類として、a類を中津式の影響によって成立したものと考えておられるが、上述のように、近畿以西で中津式が成立した可能性は小さい。そこで、称名寺式・中津式の検討を行ない、それを踏まえた上でその成立について考えたい。

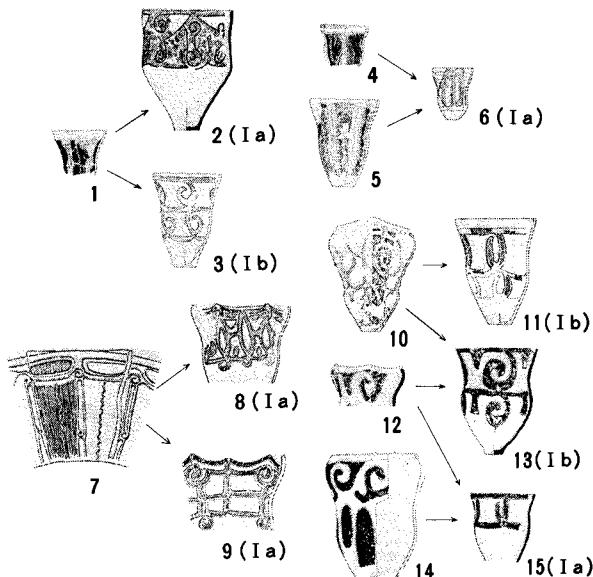
(c) 中津式・称名寺式について

まず、中津式の主要文様要素の1つである0字文について検討する。（第i図）

17 枠状のモチーフと0字文の組合せ

18 枠状のモチーフと0字文の組合せだが、口縁部文様と胴部文様が区別されている。

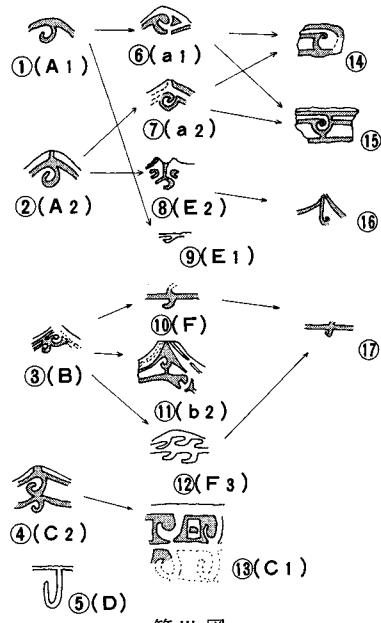
19 枠状のモチーフと下端が開いた0字文を組合



第ii図 註(6), (7)文献より転載

表 ii

	関 東	東 海	近 畿	瀬戸内 東 西	東～北九州
第 I 段階	17			○	
18			○		
19		○			
第 II 段階	22			○	
23			○		
20			○ ○		
21			○ ○	○	



第iii図

わせたもの

20 「ハ」の字状の沈線間に突起状のモチーフを有するもの

21 20の突起状のモチーフがベルト状になっているもの

22 17に類似するが、枠状のモチーフが見られないもの

23 18に類似するが、枠状のモチーフが見られないもの

さて、20は17のネガティブな部分をポジティヴな文様としていることから、 $17 \leftrightarrow 20$ という関係が想定でき、同様の理由で $17 \leftrightarrow 21$ も成り立つ。22と17の差違は枠状のモチーフの有無であることから、 $17 \leftrightarrow 22$

という関係が成立し、同様の理由で $18 \cdot 19 \leftrightarrow 23$ という関係を想定できよう。

ここで瀬戸内地方で中津式に後続する福田K II式のモチーフ（24～26）との関連で考えると、 $20 \rightarrow 25$ 、 $22 \cdot 23 \rightarrow 26$ 、 $21 \rightarrow 24$ という関係を想定できることから、 $17 \rightarrow 20 \sim 22$ 、 $18 \cdot 19 \rightarrow 23$ という方向性が成り立つ。一方、口縁部文様帯を作出せず、枠状のモチーフで、口縁部文様帯を表現するという共通性から、17～19を同一段階とし、枠状モチーフをもたないという点で、20～23を同一段階とし得ることから、前者を第I段階、後者を第II段階としたい。なお、17～19は平式の14にその祖形を求めることが²²できる。各モチーフの分布は表iiに示すとおりであり、0字文はほぼ瀬戸内以西に分布するが、第I段階のモチーフは西瀬戸内にはみられないようである。

このようにみると、平式から中津式の0字文は成立するが、渦文は成立し得ないようであり、東瀬戸内の里木III式、西瀬戸内の福田C式を祖形として中津式が成立したとも考え難いことは既述したとおりである。よって、中津式の渦文が称名寺式の影響によって成立した可能性が大きくなることから、今村氏の称名寺I式a—b類について若干の検討を行ないたい。²³

（第ii図1～15）

称名寺I式a類の文様を構成する要素は、J字文、渦文（1段・2段）、枠状文（縦に展開するもの・横に展開するもの）、ベルト状文などである。このうち、J字文と1段の渦文以外の要素は加曾利E IV式（12・14）には見られない。²⁴しかしながら、これらの要素は加曾利E IV式に先行するとされる加曾利E III式あるいは曾利III式（1・4・5・7・10）に認められるのである。まず2段渦文の1→2は明らかで、1のネガティブな文様部分をポジティヴな文様としているのが3であることから1→3も成り立つ。6は4と5の要素を合わせもっていることか

表iii

		関東	東海	近畿	瀬戸内 東西	東～北九州	
第 1 段 階	A	A ₁ ○(?)		○			第iii図①
	A	A ₂ ○	○	○	○		〃 ②
	B	○	○		○		〃 ③
	C	C ₂ ○	○	○(?)			〃 ④
	D	D ₁ ○					〃 ⑤
	D	D ₂ ○					〃 ⑥
	D	D ₃ ○					〃 ⑦
	a	a ₁ ○		○			〃 ⑧
	a	a ₂ ○		○	○		〃 ⑨
第 2 段 階	b	b ₂ ○			○		〃 ⑩
	c	c ₁ ○		○			〃 ⑪
	E	E ₁ ○		○	○		〃 ⑫
	E	E ₂ ○			○	○	〃 ⑬
	F	F ₃ ○			○		〃 ⑭
	F	F ○			○		〃 ⑮

ら、4・5→6が想定でき、7の枠状モチーフと活文を結合すると、9のモチーフが成立すると考えられる。7→8、12・14→15は容易に理解できよう。なお、今村氏が加曾利E IV式系とされる11・13のような2段渦文も10の系統を引く可能性がある。

このようにみてくると、称名寺I式(a・b類)は関東で成立し、²⁵西日本へ伝播した可能性が強く、このことは、関東地方で中期の阿玉台式～加曾利E式期に盛行した土器片錐、および加曾利E式期に関東地方にみられる切目石錐A種が後期初頭に近畿地方(三重県東庄内A遺跡、京大農学部遺跡)に伝播したとする渡辺誠氏の指摘と矛盾するものではない。²⁶

次に、中津式の渦文を分析することによって、さらに検討を進めたい。ここでは、形状によって分類し、それと垂下の方法を組み合せることにする。

○形状

- A. 大形で巻き込みの大きい渦文
- B. 上下に展開する渦文
- C. Aと同様の渦文が縦に2段施されるもの
- D. J字文
- E. Aに比べると、巻き込みが小さく、鍵手状のもの
- F. Bと同様に上下に展開する鍵手状のもの

さらに、A、B、Cの繩文部と無文部を反転したものを各々a、b、cとする。

○垂下の状態

1. 口縁部から直接垂下する。
2. 渦文を沈線を用いて口縁端に結合する。
3. 口縁部付近を無文帯にして、その下に渦文を施す。

両者を組み合わせたものが第iii図である。

さて、瀬戸内地方で中津式に後続するのは3本沈線の巾狭の磨消繩文帯を有する福田K II式であるが、瀬戸内西部には、2本沈線で巾広の磨消繩文帯を有する「宿毛式」が分布している。両者の関係については、中津式→宿毛式→福田K II式とする見解²⁷と両者を同時併存とする見解²⁸がある。宿毛式が主体を占める四国西南部に福田K II式が多くないことや広島県福山市洗谷貝塚における出土状況を考慮すると、宿毛式と福田K II式が併存したと考える方が妥当であろう。²⁹

以上のこと踏まえて、渦文と関連する福田K II式のモチーフを示したのが第iii図⑭～⑯である。⑭・⑮は、①・②の繩文部と無文部を反転し、沈線を入組化したものとみなせる。よって、⑭・⑮は⑥・⑦を媒介として、①・②にその組形を求めることができよう。⑯は繩文部と無文部を反転することなく、ポジティヴな部分を維持して入組文化している。⑯の形状は③より⑩・⑪に類似し、⑩・⑪→⑯が考えられるが、③→⑯の可能性もある。ところで、③は波頂部を無文にするという点で、第ii 図9(称名寺I式a類)の口縁部モチーフと共通し、その分布は

表iiiに示すように瀬戸内～関東地方に見られることから、相対的に古い段階に位置づけることができよう。よって、③→⑩・⑪→⑯が想定できるのであり、③の位置づけについては、古段階に位置づけられる②が同様に瀬戸内～関東地方に分布することと矛盾するものではない。さて③のポジとネガを反転することによって、⑪が成立することから③→⑪も想定できる。④についても、称名寺I式b類に類似し、関東～近畿地方に分布することから、古段階に位置づけることができ、ポジとネガの反転によって、④→⑯が想定できよう。⑧・⑨の形状は⑩・⑫に類似することから、⑧・⑨を⑩・⑫と同一段階に、⑤については、称名寺I式a類に類似し、関東～東海地方にかけて分布することから、古段階に位置づけることができよう。以上の事から、①～⑤を第1段階、⑥～⑯を第2段階のモチーフとみなす事ができ、その分布は表iiiに示すとおりである。表iiiから、第1段階のモチーフが瀬戸内～関東地方にかけて分布するものの、関東～東海地方を中心とし、第2段階では近畿～瀬戸内地方と東海地方以東で異なる様相を呈していることが看取できよう。⁽³¹⁾

ところで、瀬戸内地方では岡山県吉備郡昭和町日羽ケンギョウ田遺跡で、渦文の第1段階と0字文の第I段階が主体を占め、広島県福山市洗谷貝塚で、渦文の第2段階と0字文の第II段階が主体を占めることから、渦文の第1段階と0字文の第I段階、渦文の第2段階と0字文の第II段階は、各々ほぼ同時期と考えられる。さて、ここで既述したように渦文に関して、近畿地方を境にして、第2段階の様相が異なること、及び0字文の分布がほぼ瀬戸内地方に限られることから、関東～近畿地方と瀬戸内地方の間に差異が認められる。そこで、次に半精製土器、粗製土器について検討したい。⁽³²⁾

今村氏に依ると、称名寺I式a類には、縄文を縦に間隔をあけて加えた半精製土器が伴ない、また、称名寺式には櫛状施文具による条痕を有する粗製土器が伴なうといふ。前者は三重県鈴鹿市東庄内A・B遺跡⁽³³⁾、滋賀県大津市滋賀里遺跡⁽³⁴⁾、奈良県天理市布留遺跡⁽³⁵⁾、京都市京大農学部遺跡⁽³⁶⁾、大阪府馬場川遺跡0地点⁽³⁷⁾で出土している。後者は、三重県東庄内A・B遺跡、奈良県布留遺跡、鳥取市桂見遺跡など⁽³⁸⁾で出土している。これに対して瀬戸内地方の中津式に伴なう粗製土器は二枚貝・小巻貝による条痕を有する土器で、半精製土器も称名寺式のそれとは異なっている。このように精製・半精製・粗製の各レベルで、関東～近畿地方と瀬戸内地方以西の間に差違が見られることから、ここで改めて、関東～近畿地方では称名寺式、瀬戸内地方以西では中津式としたい。⁽³⁹⁾

そこで、瀬戸内地方における渦文の第1段階と0字文の第I段階を中津I式、渦文の第2段階と0字文の第II段階を中津II式とすると、その型式変化の特徴として、棒状モチーフの消失、直線化、渦文の萎縮、縄文部と無文部の反転などが挙げられよう。中津II式は福田KII式へと型式変化するが、京都府京大植物園内縄文遺跡⁽⁴⁰⁾では福田KII式・縁帶文土器・堀之内I・II式が併行することが確認されていることから、今村氏の称名寺I式c類・II式が中津II式に併行

ると考えられる。

称名寺I式の型式変化は、渦文の縄文部と無文部の反転を基本としているようで、中津I式の型式変化との間に共通性が認められるものの、既述したように称名寺I式c類・II式と中津II式のモチーフの差違は大きい。このことは、中津I式の成立段階に関東～東海地方に向って開いていたコミュニケーション・システム⁽⁴²⁾が、中津II式期にはある程度閉じ、一方、西に向って、より開いていたことが表iiiから窺えよう。⁽⁴³⁾また、福田KII式に縁帶文の影響がみられる（第i図26）ことから、福田KII式期のある段階には、再びコミュニケーション・システムが東に向ってある程度開いていたものと考えられる。

最後に北部九州の中津式について検討したい。

北部九州では福岡県糸島郡志摩町天神山貝塚⁽⁴⁴⁾、福岡市桑原飛櫛貝塚⁽⁴⁵⁾、福岡県鞍手郡鞍手町新延貝塚⁽⁴⁶⁾、本遺跡、佐賀県西松浦郡西有田町坂の下遺跡等⁽⁴⁷⁾で中津式が出土している。資料が断片的であるが、渦文の形状、文様の直線化が見られること等から判断して、ほぼ中津II式に比定できよう。一方、前節で述べられているように、北部九州の中津式は坂の下I式後半期から坂の下II式に伴うようである。

さて、天神山貝塚⁽⁴⁸⁾では中津II式の精製土器と小巻貝による条痕を有する粗製土器がセットをなすのに対し、阿高式系土器は半精製土器とされる凹点文土器と粗製土器であり、中津式の優位が看取できる。桑原飛櫛貝塚⁽⁴⁹⁾、新延貝塚⁽⁵⁰⁾でも同様の状況である。一方、本遺跡でも中津II式の精製土器と粗製土器がセットをなしているが、主体を占めるのは阿高式系である。以上から、中津式の精製土器と粗製土器を出土しても、中津式が、 a_1 主体を占めない場合、 a_2 主体を占める場合があるようである。一方、地理的に西の方にある坂の下遺跡⁽⁵¹⁾では中津式の精製土器が客体として存在している。異系統の中津II式が伝播した段階で、精製土器と粗製土器がセットをなしていることから、この伝播がある程度の人の移動を伴うものであったことが考えられ、先に述べた a_1 、 a_2 は外来集団が在来集団に対して優位を占めて行く過程を示すものと言えるかもしれない。

この状況は既述したように、瀬戸内地方に称名寺I式（a・b類）が伝播した際の状況とは対照的であり、この現象の背景の究明などの問題は今後の課題としたい。

小稿を草するにあたり、以下に記す諸先生・諸氏にいろいろな御配慮、並びに貴重な御指導・御教示を賜った。末筆ながら深甚の謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

岡崎敬、木村幾多郎、杉村幸一、田中良之、西健一郎、西谷正、松永幸男、宮内克己、

横山浩一 (1983.3.7) (沢下孝信)

註

- (1) 三森定男「先史時代の西部日本」『人類学・先史学講座』第8巻1933
(2) 鎌木義昌・木村幹夫「中国地方の縄文式土器」『日本考古学講座』3 1956
(3) 松崎寿和・間壁忠彦「縄文後期文化・西日本」『新版考古学講座』3 1969
(4) 安孫子昭二「縄文時代後期初頭の諸問題」『平尾遺跡調査報告』I 1971
(5) 下村克彦「大宮市北袋出土の称名寺式土器」『埼玉考古』12 1974
(6) 今村啓爾「称名寺式土器の研究(上・下)」『考古学雑誌』63-1,2 1977
(7) 小稿での加曾利E式の編年は鈴木保彦他「縄文時代中期後半の諸問題~土器資料集成図集一『神奈川考古』10 1980に依る。
(8) 紅村弘「縄文中期文化」『東海先史文化の諸段階一本文編・補足改訂版』1981
(9) 小玉道明「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」1 1970
(10) 山下勝年「愛知県南知多町内海林ノ峰貝塚試掘概報」『古代学研究』77 1975
(11) 紅村引他『岐阜県坂下町門垣戸遺跡調査報告』1976
(12) 中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』II 1975
(13) 小杉宗雄他「桂見遺跡発掘調査報告書」1978
(14) 大參義一他『岐阜県史』(通史編原始) 1972
(15) 小沢一弘「美濃徳山村宮ヶ原遺跡の縄文時代遺物」『古代文化』27-10 1975
(16) 註(9)に同じ
(17) 堅田直氏の平C III式、平K I式を含む。堅田直「平遺跡」『帝塚山大学考古学研究室考古学シリーズ』1 1966
(18) 間壁忠彦「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』7 1971によると「加曾利E式古段階」とされるが、E II式とみなしせる。
(19) 註(18) 文献
(20) 田中良之「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』1980
(21) 註(6) 文献
(22) 16のモチーフ 자체は8~10に類似し、肥厚によって口縁部文様帯が作出されていることからも、平式と考えられるが、岡山県ケンギョウ田遺跡で中津式に伴って出土したことから後期初頭に位置づけることができよう。間壁忠彦「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田遺跡」『倉敷考古館研究集報』3 1967
(23) 註(6) 文献
(24) 今村氏は2段の渦文も加曾利E IV式の系統を引くとされているが、文様論的にはヒアタスが大きいようである。
(25) 文様論的には称名寺 I 式は加曾利E III・曾利III式と加曾利E IV式の要素を含むことから加曾利E III・曾利III式と加曾利E IV式が同時併存した可能性があり、すでに堀越正行氏によって加曾利E IV式をE III式に含める見解が出されている。しかしながら加曾利E III式とE IV式を検討することは小稿の目的ではないので、今後の課題としておきたい。堀越正行「加曾利E III式土器研究史」『信濃』24-2.3.4 1972
(26) 渡辺誠「縄文時代の漁業」1973
(27) 木村剛郎「高知県梼原の縄文遺跡と遺物」『土佐考古学叢書』1 1978
(28) 田中良之・松永幸男「後期土器について」『萩台地の遺跡』IV 1981
(29) 註(27) 文献
(30) 福山市教育委員会「洗谷貝塚」1976
(31) 註(6)によると、称名寺 I 式 a・b類→I 式 c 類への型式変化はポジ・ネガの反転であり、その点では近畿~瀬戸内における型式変化と共通するが、その結果、成立したモチーフは近畿~瀬戸内地方に比べてヴァリエイションに富み、異なる様相を呈する。
(32) 註(22) 文献
(33) 註(30) 文献
(34) 註(6) 文献
(35) 註(9) 文献
(36) 田辺昭三「湖西線関係遺跡調査報告書」1973
(37) 小島俊次「布留遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯1958
(38) 註(12) 文献
(39) 下村晴文「馬場川遺跡発掘調査概要」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』IV 1976
(40) 註(13)に同じ
(41) 中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』1974
(42) 上野佳也氏によると「土器型式圈は…土器文様の情報の流れにのって成立する」のであり、その流れを維持するものが婚姻と交易ということになる。即ち土器分布圏は、ある土器型式に関する情報の流れを共有しているコミュニケーション・システムと言えよう。上野佳也「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』44-4 1980
(43) 先に関東~近畿地方までは称名寺式としたが、表iiのように中津II式が近畿地方にも存在することから、近畿地方では、称名寺 I c・II式と中津II式が混在していたものと考えられる。
(44) 前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」1974
(45) 小池史哲「糸島の縄文文化」『三雲遺跡』II 1981
(46) 木村幾多郎他「新延貝塚」1980
(47) 森醇一郎「坂の下遺跡の研究」『佐賀県立博物館調査研究書』第2集 1975
(48) 註(44) 文献
(49) 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6 1979
(50) 註(45) 文献
(51) 註(46) 文献
(52) 註(47) 文献